

# デザイン相談事例(株式会社デジタルメディック)

(株)デジタルメディックは、独自開発の脳波計測装置を軸に、ストレスの自己管理をサポートするための仕組み、「ミューズ・ブレイン・システム」を展開するベンチャー企業です。今回、このミューズ・ブレイン・システムの普及にあたり、一般の方が「脳波を計測する」という未知のものに触れる不安感を払拭するために、また違和感なく機器を使用するために、外観やインターフェイスの改善の必要性を感じ、相談にいられました。

「脳波はアヤシイ。そんな思い込みがあるんです」デジタルメディックの自信作、ミューズ・ブレイン・システムは、その完成度の高さにもかかわらず、なかなかユーザーに受け入れてもらえない悩みを抱えておられました。

脳波、特にリラックス状態で多く発生するα波の状態をモニターし、その人が今、一番リラックスできる音楽を提供する。そしてその音楽を、疲労を感じた時や気持ちを落ち着けたい時に聴いて、自分でストレスをコントロールする…。核となる脳波計測部のα波計測精度は、研究・医療用で使用されている機器と遜色ないほど。そして、その結果を基に、膨大なストックの中から最適な音楽を抽出し、その傾向を自己学習するサーバーとの組み合わせで成立するこのシステムは、2年前に初めて相談にいられた当初から高い完成度を持っていました。

実際、この計測部の開発に当たっては数百人のモニターの方々を使用してもらい、性能評価とともに、完成度を上げる作業を行ったそうです。しかしその中で、「えー、これを着けるの?」「セットが崩れそう…」という、装着に抵抗感を示す人が数多く現れたとのこと。そのため、木村社長は「装着している姿が、ユーザーが見慣れた姿の方がよいのではないか。例えばカチューシャのようなものはどうだろう」というイメージを持っておられました。

また、いろいろな企業にこのシステムのプレゼンテーションを行った際にも、興味を持つ人は多くいましたが、試しにしてみようという人がなかなか現れなかったそうです。その一番の原因が、いかにも手作りの感じがする計測部と、無機質なソフトウェアのインターフェイスといったデザイン面にあると感じた木村社長は、その改善にデザイナーの起用を考えておられました。

しかし、残念ながら当初考えておられたデザイナーと、製品化に向けた考え方で折り合いがつかなかったため、改めて、デザインの方針について当センターに相談にいられました。

そこで、当センターではまず、製品の特性からデザインの方向性を考えました。今回のケースの場合は、今まで市場にはなかった製品であるため、強力な競合商品は見当たりません。むしろ、説明がなければ何をやるものかがわからないことのほうが大きな問題と思われました。そのため、

強い個性を打ち出していくという方向性ではなく、木村社長が当初考えておられた、カチューシャを着けるイメージのように、自然に使い方がわかることを重要視した方向でデザインを進めればよいのではないかとアドバイスを行いました。

また、もう一点として、本システムはまったく新たな分野の開拓になるので、ユーザーインターフェイスに関して多角的な切り口での意見を得るべく、当センターで予定していた「統合医療に関する研究会」などへの参加が有効ではないかとアドバイスを行いました。

具体的なデザインについては、その後パートナーとなるデザイナーに巡り会われ、希望に近いデザイン開発ができたことのお知らせをいただきました。そして、これからはいよいよ新しい市場へと乗り出していかれるにあたり、現在は、「統合医療に関する研究会」のメンバーの一人として、第三者の評価を受けながら、さらに磨きをかけ、様々な使用シーンの可能性を探っておられます。



写真1 ミューズ・ブレイン・システム

## DATA

株式会社デジタルメディック

住 所 京都府向日市物集女町坂本13-9

連絡先 075-933-6088

E-mail kimura@digital-med.com

【お問い合わせ先】

京都府中小企業技術センター  
企画連携課 情報・デザイン担当

TEL:075-315-9506 FAX:075-315-9497

E-mail:design@mtc.pref.kyoto.lg.jp